倫風宏話

自然の警告にどう応えていくか

上廣哲治

最近、宮沢賢治の童話『グスコーブドリの伝記』が「地球温暖化」との関連で注目を集めているようです。この童話が発表されたのは一九三二年（昭和七年）。「満州国」の建国が宣言され、五・一五事件が起きた年です。当時から、地球の温暖化や気候変動が大きな問題となっていたのでしょうか。まず、物語のあらすじをたどってみましょう。

イーハトーブの森に住む樵の息子ブドリは、両親や妹と平和に暮らしていましたが、冷害による飢饉で両親を失い、妹と生き別れて独りぼっちになってしまいます。さまざまな苦難に遭いながらも、生きるために懸命に働いた彼は、やがて火山局の技師となり、噴火被害の軽減などに努めました。しかし、イーハトーブはまたしても大きな冷害に襲われてしまいます。これまでのような飢饉を繰り返さないためにブドリが考えたのは、カルボナード島の火山を爆発させ、大量の炭酸ガス（二酸化炭素）を発生させることで気温を上げるという方法でした。彼は自らの考えを「恩師」のクーボー博士に伝えます。そのときに交わされた次の会話は、地球温暖化説を先取りするような驚くべき内容でした。

「先生、気層のなかに炭酸瓦斯がふえてくれば暖かくなるのですか」

「それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、たいてい空気中の炭酸瓦斯の量できまっていたと言われるくらいだからね」

「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変えるくらいの炭酸瓦斯を噴くでしょうか」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、瓦斯はすぐ大循環の上層の風にまじって地球ぜんたいを包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度くらい温にするだろうと思う」（『グスコーブドリの伝記』）

このあと博士は、火山を人工的に噴火させることはできるけれど、その仕事にいった者のうち一人は噴火から逃げることができないと忠告します。犠牲になることを覚悟したブドリは、火山を爆発させて島に残りますが、噴火によって冷害は食い止められ、イーハトーブは救われることになるのです。

ブドリの自己犠牲の是非については、さまざまな意見が出されています。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（『農民芸術概論綱要』）という宮沢賢治の思想を反映しているともいえますが、この問題は改めて取り上げることにし、ここでは「温暖化」の問題に焦点を絞りましょう。

人間の活動によって地球が温暖化することが指摘されはじめたのは、最近のことではありません。十九世紀末にはスウェーデンの科学者アレニウスが、大気中の二酸化炭素の濃度が上がると温室効果によって気温が上昇することを指摘しています。

アレニウスの説は大正期には日本にも紹介され、宮沢賢治もその内容を知っていただろうといわれて

います。しかし、アレニウスも賢治も、温暖化を「豊作」をもたらす現象として、むしろ好意的にとらえていたようです。『グスコーブドリの伝記』が書かれた頃、東北地方はしばしば冷害に襲われていました。とくにこの童話が発表される前年の一九三一年には、北海道や東北地方が冷害による大凶作に見舞われ、女子の身売りなどが深刻な問題となっていたのです。

アレニウスが予言した地球温暖化は、一世紀以上たった現在、ほぼ間違いのない現象として問題視されるようになりました。ただしそれは、アレニウスや賢治が期待したようなものではなく、地球環境に甚大なダメージを与え、多くの災害を引き起こす原因として取り上げられるようになったのです。

国連の一組織である「気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）」は、昨年八月、「第六次評価報告書」の一部を発表し、「人間の影響が大気、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない。大気、海洋、雪氷圏及び生物圏において、広範囲かつ急速な変化が現れている」と断言しました。そして、最近の気候変動の規模は「何世紀も何千年もの間、前例のなかったものである」としています。

こうした報告の根拠となったのが、昨年ノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎さんの研究でした。真鍋さんは二十年ほど前のインタビュー記事で次のように語っています。

「温暖化問題というのは、自分の生きている間はまだ大したことにならないだろうと、〔多くの人が〕思っているのではないでしょうか。自分が死んだ後のことまで心配できる余裕を持っている人がどのくらいいるか――。現在、痛みを感じるようなことであれば、本気の度合いも違うのでしょうけれども」（『日経エコロジー』二〇〇〇年十一月号）

インタビューが行われた当時はまだ、一部の識者を除いて、地球温暖化に危機感を持っている人は少

なかったように思います。その後、多発する水害や大規模な森林火災などを目の当たりにし、多くの人が気候の「異常」を実感するようになりました。しかし、それでも人々は相変わらず、真鍋さんが言うように「自分の生きている間はまだ大したことにならないだろう」と思っているのです。

これは、実践倫理の観点からいえば、反省しなければならない姿勢です。

実践倫理を一本の木にたとえれば、根元にあってすべての実践を支えているのが「大自然の摂理」です。それは、この宇宙を成り立たせ、私たち人間を今あるように存在させている根本原理で、人が勝手に定めたり変えたりすることのできないものです。わが会にとってもっとも重要な実践課題である「我も人もの仕合わせ」も、大自然の摂理から導き出されたものであり、私たちはこの摂理に照らし合わせながら、自らが正しい道を歩んでいるかどうかを検証していかなければなりません。

地球の温暖化は、人間が大自然の摂理から外れた行動をとってきたことへの厳しい警告です。そうであれば、すぐにも自らの行動を改めるのが倫理的な姿勢というものです。ところがこの警告を前にして、国も企業も、そして私たち自身も、自らの利益を優先し、なかなか行動を正そうとはしません。ひどい場合には、環境保護を口実に、ひと儲けしようとする企業や人まで現れてしまうのです。

こうした姿勢が「我も人もの仕合わせ」、すなわち他者の仕合わせがあってこそ自らの仕合わせがあるという「共生」の思想に合致しないのは明らかです。「我も人もの」の「人」は、家族や身近にいる人だけを指すのではありません。それは、地球上に住むすべての人でもあり、今はまだ存在しない未来の人でもあるのです。私たちはそろそろ、「自分の生きている間は大丈夫」という利己的発想の殻を破り、広い意味での他者との共生、自然との共生を追求していかなければならないでしょう。